

授業研究 ハンドブック

高等学校版

天童高校に学ぼう！
創造性・協働性・合理性
が高まる授業研究の実践



図1と図2は、平成19年度に県教育センターで、県内小学校・中学校・高等学校の教員285名を対象に実施した「校内研究に対する教員の意識調査（アンケート）」の結果です。この調査結果から、高等学校における校内研究は、小学校や中学校から比べると、決して活発に取り組まれているとは言えない状況が見えてきました。また、「高等学校の授業研究の課題や問題点は何か。」という問いに対しては、「教科を越えた取組みが少ない。」「授業研究を行う時間的な余裕がない。」という記述が多くありました。このことから、「教科の壁」や「多忙感」が高等学校での授業研究の隘路になっていることが見えてきました。

本ハンドブックでは、このような全県的な課題と自校が抱える課題を克服しようと、授業研究に取り組んだ県立天童高等学校の実践を基に、県内の高等学校でもすぐに実践できる内容を紹介していきます。昨年度、県教育センターで発行した「授業研究ハンドブック」も併せてご覧ください。

Q1 あなたの学校では、今年度教科の授業研究が実施（計画）されていますか。

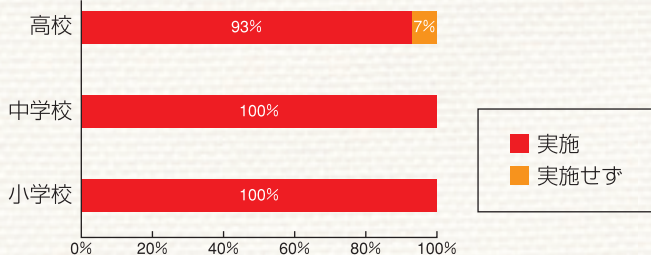


図1

Q2 あなたの学校では、授業研究はどれくらいの頻度で実施されていますか。

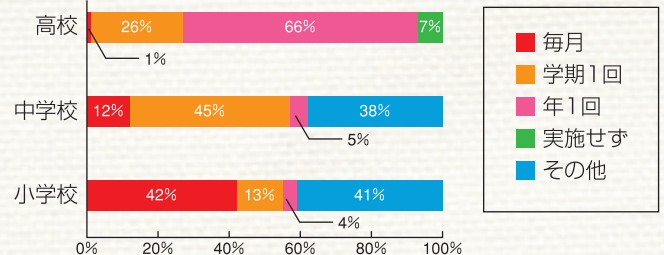


図2

小学校・中学校の「その他」には、隔月・年に複数回実施が含まれる。

18歳からのメッセージ

私たちは、間もなく就職、進学とそれぞれの道に踏み出します。現在私たちが学んでいる高校は、普通科の高校や専門学科の高校、総合学科の高校などの違いはありますが、考えてみると、小学校・中学校、そして高等学校と、ずっとつながりの中で学んできたと思います。学習指導要領というものが、高校までは、前の段階の学校で学んだことを踏まえて、学ぶ内容などについて、目標とともに定められていると聞いています。

みんなそろって学校で体系的に学ぶということは、多分、高校までで終わりとなります。ここからは、自分で学び、必要な知識を得、仕事や学問では自分の言葉で語り、独立した個人として、新たな仲間や社会とつながっていかねばなりません。そのことを思うとき、高校で教えてくださる先生方に、お願いがあります。

先生方は、よく私たちのことを考えてくださり、様々なことを教えてくださいました。授業でも、面白くたべになることがたくさんありました。その中から、自分がさらに学びたいことを見つけた仲間もいます。先生の研究熱心さに刺激され、就職後に直接役に立つ技術を身につけて、難しい資格を取った人もいます。

ただ、高校では、教科ごとに先生が替わるだけでなく、教科ごとの難しさが急に強まり、他教科とのつながりや、社会生活との関わりが見えないことも多かったです。予習や質問をしない私たちも悪かったとは思いますが、1時間の終わりに首をかしげ、友達と顔を見合わせることもよくありました。特に、専門的なことを、「〇〇と言うんだぞ。わかったな。」とか、「ここは、大切だから覚えてください。」などと言われて、その意味もわからず、きょとんとすることも多かったです。説明が理解できないほかに、授業のスピードが速く、板書がわからないこともありました。

それから、「高校は、勉強と部活」とよく先生方から言われました。部活では大いに発散した私たちですが、勉強は、進んで学ぶというより、文字通り「強いて勉める」印象が強かったです。大変でも、厳しくてもいいから、自分たちが参加して、勉強も面白ければよかったなと思います。欲張りな願いですか。それから、「勉強は、自分のために一人でするものだ」とも言われました。毎日登校して、みんなで学ぶということは、高校の場合、別なのでしょうか。

数年前、高校の教頭先生方が、県内のある地区のすべての高校で、先生方の授業について生徒による評価をしてもらい、同じ内容で先生方にも調査を行ったそうです。その時、「先生方は、わかりやすい授業をしてくれる」と評価した生徒は、20%に満たなかったと聞きます。これに対して、「自分は、わかりやすい授業をしている」と回答した先生は、60%を超えていたそうです*。この話を聞いた時、私たちの実感とも重なる気がしました。

確かに、志願して入学した高校ですが、教科の専門である先生が、生のまま知識や考え方を私たちに伝えるのではなく、私たちとのコミュニケーションを大切にして、その上に伝えたいことを乗せてもらえれば、多分、難しいことも自分で噛み砕こう、あるいは、クラスのみんなで議論して納得しようという気持ちも高まったのかなと思うことがあります。

私たちは、今旅立ちます。不安ですが、自分から学ぶ姿勢を持たなければならないということだけは薄っすら感じています。自分でしっかり言葉を持ち人とつながるために、高校でも、知識だけでなく、学び方や、そのための議論の仕方なども体験できれば、なおよかったと思います。

先生方は、先に生まれた、人生の素晴らしい先輩方です。私たちは、あとから生まれましたが、先生方の先の時代を生きて行きます。そして、国民投票の主体でもある18歳です。少子高齢化がどんどん進む中ですが、社会をリレーし、支え、創造して行きます。どうか、高校3年間の学びが、私たち一人一人の人生の基礎・基本となるように、毎時間、よい授業を携えて教室に出向いてください。先生方が、それぞれの高校にいる私たちのことを、よく見て考えて、一致して行動してくれている姿は、何より頼りがいがあり、毎日頑張る励みになります。

*『授業評価に基づく学習指導法改善の視点』（県高校教頭会村山地区教頭会研究発表2005）より



県立天童高等学校の紹介（平成22年度）



- ① 生徒数:592人
- ② 教職員数:58人
- ③ 教育目標:「進取・自律・融和」
- ④ 本校の総合学科が目指すもの
 - (1) 進路や興味・関心に応じて、多くの教科・科目の中から自分で科目を選択し、自分の時間割を作ります。
 - (2) 決められた単位（3年間で74単位）を修得すれば卒業できる「単位制」です。
 - (3) 職場体験や大学見学などの体験学習を大切にし、ボランティア活動に積極的に参加しています。
 - (4) 進路目標に応じてより深く学習するために、本校独自の科目（学校設定科目）を多く開講しています。

**本校の生徒の実態から課題を設定し、
全教員共通のテーマを下図のように設定しています。**

研修
テーマ

『各教科等において、言語活動の充実を図る』

— 各教科等で批評、論述、討論、発表などの学習を充実させる —

- ◆ 本校の進学はAO・推薦入試が中心である。（面接・小論文）
- ◆ 堅調な就職状況、東北有数の公務員現役合格状況である。（面接・作文）
- ◇ 多様な進路希望に応えつつ、「進学型総合学科高校」をめざす。（上記に加え一般入試も）

これ
から
も

- ◆ 「産業社会と人間」「総合的な学習の時間」、特別活動等による体系的で充実したキャリア教育の実施
- ◆ 人間関係形成能力、将来設計能力、情報活用能力、意思決定能力の育成

比較的、「表現力」の育成に比重をおく。

これ
から

- ◇ 各教科・科目（各授業）においても言語活動を充実させる学習活動が必要
- ◇ 「見る・聞く・書く・話す」力を育成

今後は、「思考力・判断力」の育成にも力を入れる。

言語活動の充実（思考力・判断力・表現力）



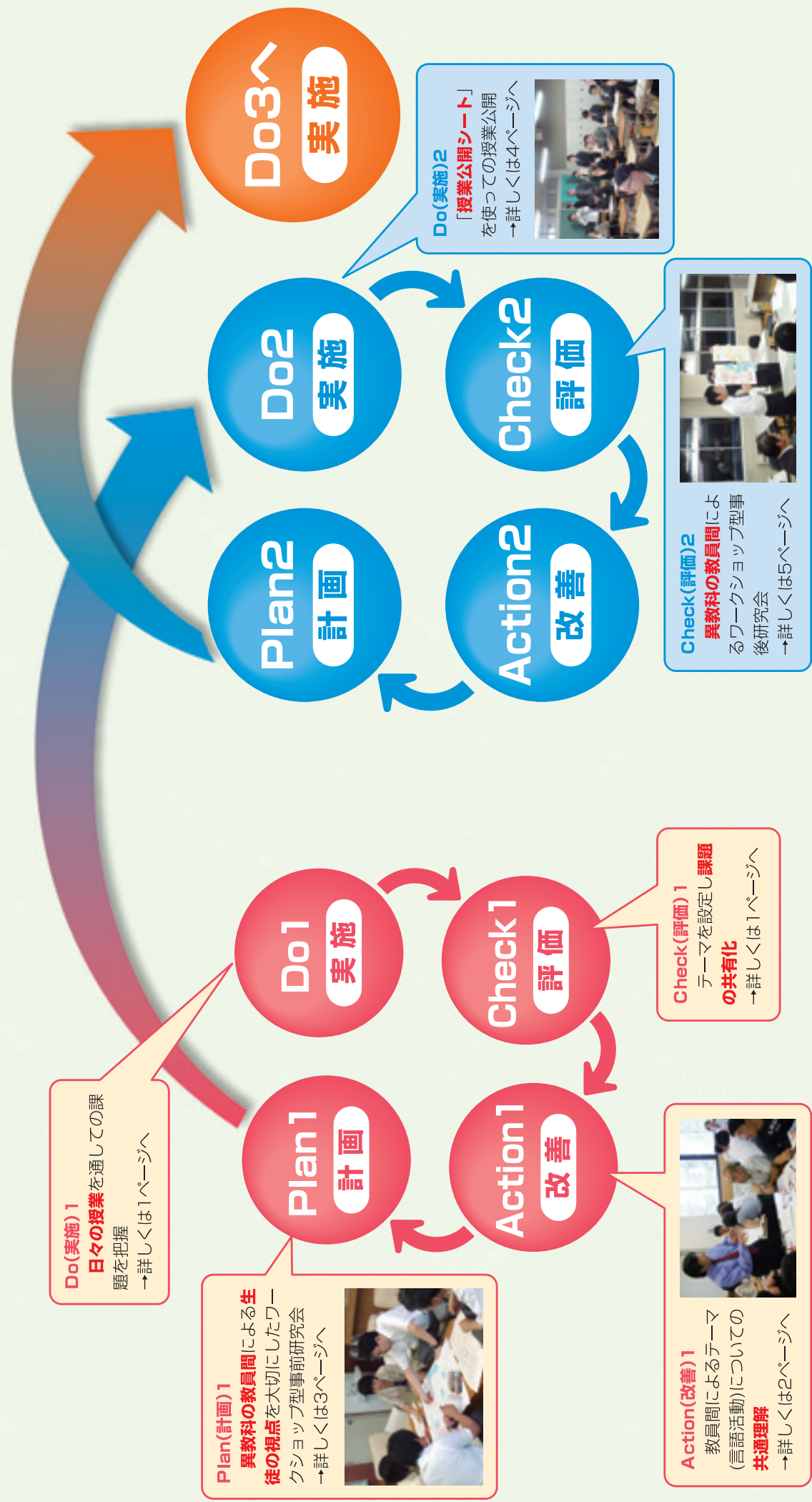
平成22年度の授業改善職員研修会のテーマ

天童高校に学ぶ！

創造性・協働性・合理性が高まる 授業研究の実践

生徒の実態を基に異教科の教員で授業を語る！

「教科の壁」「教員の多忙感」という全体的な課題の解決と自校で設定したテーマの実現に向けた取組みが天童高校で始まっています。日々の授業の実態を大切にするという視点からDo(実施) Check(評価) Action(改善) Plan(計画) というサイクルで研究を進めました。また、異教科の教員間でワークショップ型の事前研究・事後研究にも取り組みました。それにより、教員の創造性と協働性、そして、校内研究会の合理性が高まりました。



Do1

実施

実践のためのキーセンテンス

日々の授業の課題を大切にする

概要

授業研究の主たる目的は、教員の授業改善と指導力の向上です。したがって、授業研究を実施するにあたって最初にすべきことは、授業改善と指導力の向上のために解決しなければならない課題を明らかにすることです。

天童高校では、授業者である教員が、生徒一人一人の進路の実現のために、日々の授業においてどのような**課題**を抱えているのかについて、**丁寧に集約**しました。

『課題を丁寧に集約する。』とは？

天童高校の特徴としては、

1. 教務主任が、日ごろの教員の声に耳を傾けたり、授業研究会で話し合われた内容を集約したりして、教員が抱えている課題を全体に知らせる。
2. 校長の学校経営方針を受け、教務主任（ミドルリーダー）を中心とした教育課程編成のためのプロジェクトチームを組織し、課題について協議を行う。



この実践に
学ぶ！



「日々の授業の課題は、日々の教員の言葉に表れる。」
という視点をもって、研究会や会議など形式や進行が決まっている場だけではなく、普段の教員の声に耳を傾けている。

Check1

評価

実践のためのキーセンテンス

テーマを設定し課題を共有する

『教務主任を中心に』とは？

いわゆるミドルリーダーに該当する、教務主任や学年主任が中心になり、校内で「〇〇に取り組んでみよう！」と発信している。トップダウンではなくボトムアップないし、ミドルアップダウンの発想に立つことで、教員間に、より主体的な雰囲気が生まれる。



概要

課題を把握しても、出された課題は多岐にわたり、いよいよ課題解決に向けた取組みを行おうとした際に、教員は何をどのように行えばよいかイメージできません。

天童高校では、集約した課題をそのままにせず、**教務主任が中心**になり、学習指導要領のポイントを考慮に入れながら、多角的に整理・分析しました。そして、授業改善につながる共通のテーマ「『各教科等において、言語活動の充実を図る』—各教科等で批評、論述、討論、発表などの学習を充実させる—」を設定しました。

この実践に
学ぶ！



ミドルリーダー、特に教務主任のリーダーシップの下、全教員共通の授業改善のテーマが設定されている。

Action1

改善

実践のためのキーセンテンス

設定したテーマについて共通理解を図る

概要

課題が明らかになり、そこから授業改善のテーマを設定しました。そのテーマに基づいて、各教員は日々の授業を行っていきます。しかし、テーマに対する具体的なイメージが各自違っている場合が多いようです。そうすると、学習活動や指導方法などに一貫性がなく、教科によるばらつきが出てしまいます。

天童高校では、各教科等の日々の授業で、テーマ(言語活動)について具体的にどのような学習活動に取り組み、どう指導をしていくかについて考えを出し合うことにしました。そこで、鳴門教育大学教授 村川雅弘先生と、中村学園大学講師 田村知子先生を招聘し、「授業改善研修会」を開催しました。教員の声をできるだけ多く反映させるために、ワークショップを取り入れた研修としました。

研修会の実際

研修のねらい

同教科の教員同士が、本校のテーマに対する具体的なイメージを共通にもつ。

事前の準備

- 1 班編成 教科ごと4～6人
- 2□ 今後授業で扱う単元等の単元計画を拡大コピーし模造紙の真ん中に貼ったもの
 - 付せん紙
 - 黒のサインペン
 - 多色のフェルトペン

右写真参照

研修の流れ

- 1 教務主任による「本校で設定したテーマ」についての確認
- 2 村川雅弘先生による「新学習指導要領が目指す言語活動の充実」についての解説
- 3 ワークショップ
 - (1) 教科ごと準備した単元計画案を確認し、同教科の教員間で言語活動を取り入れられる学習場面を考える。
 - (2) その場面での指導上のポイントや留意すべき点などを考え、各自が付せん紙に書く。
 - (3) 同教科の教員間で、書いた付せん紙に一言説明を加え、単元計画案のあてはまる箇所に貼る。
 - (4) 貼った付せん紙を仲間分けし、見出しを付ける。
 - (5) 構造化を図り見出しを付けたグループ間の関係性を明らかにする。
 - (6) 班(教科)ごと話し合われたことを報告する。

実際に向けたポイント



ワークショップを始める前に、テーマについての再確認及び言語活動についての共通理解を図る。

ワークショップの経験のある人が全体コーディネーターを務める。(経験者がいない場合は、外部の講師に依頼することも考える。)

参加した教員の声

教科内で話し合いをする機会が不足していたことに気付いた。

他教科の先生の話が興味深く勉強になった。

教員も顔を突き合わせて話し合わないで「分からない。」「理解できない。」「良い方向は目指せない。」ことが分かった。

経験と勘だけを頼りに教育活動をやってきたことに気付いた。30年間教職に携わってきたが、教育実践の整理体系化(PDCA)の必要性を痛感した。

この実践に学ぶ!



テーマを設定するだけにとどまらず、具体的にどのような手立てを講じて、日々の授業に取り組んでいくのかを共通理解している。



Plan1
計画

実践のためのキーセンテンス

異教科の教員が、生徒の視点に立った
事前研究を行う

概要

授業力向上の鍵を握るのは、教師一人一人の授業改善です。日々の授業づくり(教材開発や教材研究などの事前研究)をいかに充実するかが重要となります。そこで、授業を参観し事後研究を行う授業研究会に加え、指導案の作成に向けた実質的かつ合理的な事前研究が必要になります。

天童高校では、短時間で生徒の実態を踏まえた検討ができるように、60分～70分の時間限定で、異教科の教員間による事前研究会を実践しました。異教科の教員が集まることで、各教科等の授業で見られる生徒の実態や、どのような言語活動が実践されているかなどを確認することができます。また、異教科（該当教科については専門外）であるがゆえに、初めて学習する生徒の視点で意見や考えを出すことができます。

事前研究会の実際

ねらい

指導案(単元計画)作成初期の段階で、異教科の教員が生徒の視点に立った意見や考えを出し合い、授業改善につながる事前研究を行う。

事前の準備

- 1 班編成 異教科の教員同士で4～6人
- 2 □ 単元計画を拡大コピーし四つ切り画用紙の真ん中に貼ったもの
 - 付せん紙
 - 黒のサインペン
 - 多色のフェルトペン

右写真参照

会の流れ

- 1 授業者が「単元計画」作成の意図を説明し、現段階での授業者の課題や悩みについて共通理解を図る。
- 2 事前研究会へ参加した異教科の教員は、授業者の課題を受けて課題解決のための具体的なアイデア(手立て)を、言語活動という視点も考慮に入れながら付せん紙に書く。(生徒の学習活動に関するアイデアは青色の付せん紙に、指導上の留意点や支援に関するアイデアは赤色の付せん紙に記入する)
- 3 一言説明を加えながら、書いた付せん紙を単元計画書の該当箇所に貼る。
- 4 同じ内容の付せん紙を仲間分けし、見出しを付ける。
- 5 出されたアイデアを「単元計画」にどう生かしていくかを検討する。
- 6 班ごと話し合われたことを報告する。
- 7 授業者から一言感想をもらう。

参加した教員の声

- 異教科の先生の考えは参考になった。
- 異教科で行くと生徒の視点で意見が出され、生徒の声を聞けるような気がした。
- 事前研究会をやると研究授業が楽しみになった。

授業者の声

- 異教科の先生の素朴な疑問点が聞かれて、生徒の視点で授業を考えることができた。
- 異教科の先生の意見や考えなどを聞いて、これまでの自分の授業実践を点検することができた。

実際に向けたポイント



授業者が作成した単元計画を準備できない場合は、教科書の単元計画をコピーし、それをたたき台にしてもよい。

あくまでも、授業者に負担感をもたせないように授業者の準備の進捗や意向を最優先する。

初めて該当単元を学習する生徒の実態(気持ち)を重視するために、生徒の視点でアイデアを考える。

様々なアイデアが出されるが、取捨選択等の最終的な判断は授業者に委ねる。

この実践に
学ぶ!

生徒の実態（初めて学習する生徒の気持ちや思考過程など）を重視するために、異教科の教員間で事前研究を行っている。



▲ 付せん紙に書きながら生じた疑問に授業者が答えている。

Do2
実施

実践のためのキーセンテンス

「授業公開シート」を使って、授業を見る際の視点を共有する

概要

授業を参観する際は、授業を見る視点を明確にする必要があります。ただ、漠然と授業を眺めていても適切にその授業を評価することはできません。事前研究会で話し合われたことや、その時の授業者の課題などを再確認し、それらを参観する際の視点としていきます。そうすることで、参観する側に共通の視点が生まれ、それに添って事後研究会でも協議することができます。

天童高校では、授業者の思いや事前研究会で話し合われたことなどを基に、「授業公開シート」に授業を参観する際の視点を表していきます。これがあると、事前研究会に参加できなかった教員も、共通の視点をもって授業を参観し、事後研究会でも協議に参加しやすくなります。

授業公開の実際

事前の準備と
授業公開までの
流れ

- 1 「授業公開シート」を準備する。
- 2 「授業公開シート」に、授業者が必要な情報（授業者の思いや事前研究会で話し合われた内容など）を記入する。
- 3 事前に増し刷りして、指導案と一緒に参観者へ配る。（できるだけ指導案や「授業公開シート」に目を通せるように早めに配ることが望ましい。）
- 4 参観者は授業を見ながら気付いたことを「授業公開シート」に直接記入したり、授業後振り返りながら記入したりする。
- 5 参観後、記入した「授業公開シート」を回収する。
- 6 参観者全員分のシートを、事後研究会へ参加する人数分増し刷りして配る。

実際に向けたポイント

下図のような「授業公開シート」を研究主任や教務主任が準備をしておく。

校内研修用 授業公開シート	
実施日・時間	
授業者	
教科・科目	対象クラス
単元	単元・単元名
場 所	
場 所	授業参観記録
本時の狙いやポイント	参観者コメント記入欄
説明や指導等の工夫	
生徒が授業に引きつけられる工夫	
授業を通して学びを促す工夫	
思考力、判断力、表現力、知識・技能向上のための工夫	
その他の工夫	
授業者が参観者に特に聞きたい事項	
授業者が聞きたい事項	参観者の感想・意見
教科のなりたい姿を達成させるための参観の視点について生徒の感想はどうだったか。	

※ 記入のよ、授業参観で書かれた通りに記入します。

参加した教員の声

異教科の先生が行っている授業の進め方や指導方法が大変参考になった。

異教科の教員にとって「授業公開シート」があると、授業を見る視点が明確になりよかった。

生徒の視点で授業を見ていると、授業者の声の大きさ、板書の仕方、生徒への接し方など、気になる点が多くあった。

この実践に
学ぶ!



漠然と授業を参観するのではなく、授業を見る視点を明確にしている。



▲ 共通の視点をもって、参観者も生徒の様子を観察している。

Check2

評価

実践のためのキーセンテンス

異教科の教員間による事後研究会で、生徒の視点から改善策を考える

概要

「話したいけど話せない。」雰囲気…。会議や協議会などでよくある光景です。本来であれば、参加者が侃々諤々^{かんかん}と意見を戦わす場になるはずですが、なかなかそうはいきません。事後研究会においても、このような雰囲気にならないよう、参加した教員一人一人の意見や考えが尊重され、互いに学び合えるようにすることが必要です。

天童高校では、異教科の教員によるワークショップ型事後研究会を開き、参加者全員の意見を出せるように工夫しました。また、授業の善し悪しに特化した協議ではなく、本時の授業の課題に対する改善策を考えられるようにしました。

事後研究会の実際

ねらい

異教科の教員間で、生徒の視点に立った協議を行い、授業改善につながる様々なアイデアを得る。

事前の準備

- 1 班編成 異教科の教員同士で4～6人
- 2 ☐ 指導案を拡大コピーし四つ切り画用紙の真ん中に貼ったもの
- ☐ 付せん紙
- ☐ 黒のサインペン
- ☐ 多色のフェルトペン
- ☐ 増し刷りした参観者の「授業公開シート」

会の流れ

- 1 増し刷りした他の参観者の「授業公開シート」と自分の書いたシートを比較する。
- 2 各自が考える参観した授業の成果と課題を付せん紙に記入する。(成果は赤色の付せん紙、課題は青色の付せん紙)
- 3 成果と課題を出し合い仲間分けをし、見出しを付けて、本時の成果と課題を確認する。
- 4 仲間分けされた課題についての改善策を考え、黄色の付せんに記入する。
- 5 付せん紙に記入した改善策を出し合い、分類・構造化してみる。
- 6 班内で意見交換をする。
- 7 班ごと話し合われたことを報告する。
- 8 授業者が感想を述べる。

実際に向けたポイント



※表紙の拡大図参照

参観者全員の「授業公開シート」があるので、事前研究会に参加しなかった教員も、これまでの課題を共有し視点に添った協議ができる。

協議の内容が授業の善し悪しで終始することなく、課題の改善策について協議することで、各自の授業改善に役立つ。

参加した教員の声

- いろいろな意見があって気付かされた点が多い。世代や経験のあるなしに関係ない。
- 他の人と話すことにより、授業テクニックが磨かれ、とてもプラスになった。他人力もすごいと実感した。

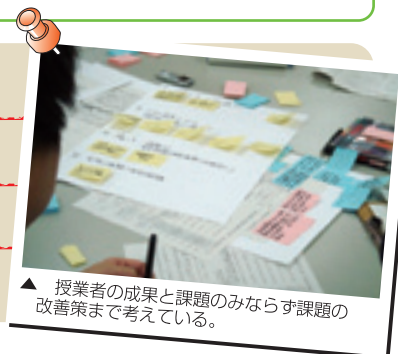
授業者の声

事前研究会の指摘を受けて通常と異なる視点で授業を考えることができた。異教科の先生の考えを聞くことができ、たくさんの発見があった。大変参考になった。

この実践に学ぶ！



「授業公開シート」を使って、授業を見る視点＝協議の柱を明確にし、異教科の教員間で事後研究会を行っている。



▲ 授業者の成果と課題のみならず課題の改善策まで考えている。

まとめ(教員の声)

教員の創造性

多様な視点が得られることで、自分の授業をじっくり見つめ直すことができた。

自分の授業で、テーマを意識した言語活動（ディベート、スピーチ、書かせて発表など）を取り入れるようになった。

他教科の授業内容や指導方法に触れることは自分の教科にも大変役立った。



▲ 教員の学ぶ意欲は、校長・教頭の自ら学ぼうとする姿に触発される。

多様なアイデアが出され、それを自分の授業に生かしていることがポイントです。

教員間の協働性

自分の教科では「分かって当然。」という気持ちがあったが、異教科の先生から見ると、なかなか分かりにくい点があることに気付いた。

同じ教科だと得意な人の集団になり、生徒の実態に合わない計画も通ってしまうことがあるが、異教科では、生徒の視点での意見が出るので、大変よい。



▲ 何でも言い合える雰囲気があり、顔を突き合わせて議論している。

「異教科の教員の意見や考えは、生徒の声に通じている。」と感じている点がポイントです。また、校長や教頭そして教務主任が、教員間の前向きな雰囲気をつくっている点もポイントです。

授業研究会の合理性

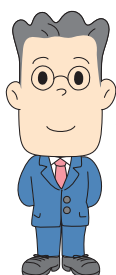
教材研究にもっと時間がとれるような学校のゆとりがほしい。

取組みの中身はよいが、多忙な中での負担も大きい。

教員の仕事が、授業や部活以外にもこんなにあるのかと驚いている。もっとスリム化して教材研究や研修のできる時間があればよい。

事前・事後の研究会の時間設定はもちろんのこと、年間を通して、授業研究会をどのように設定していくか、意図的・組織的に計画を立てることがポイントです。

教頭先生の言葉より



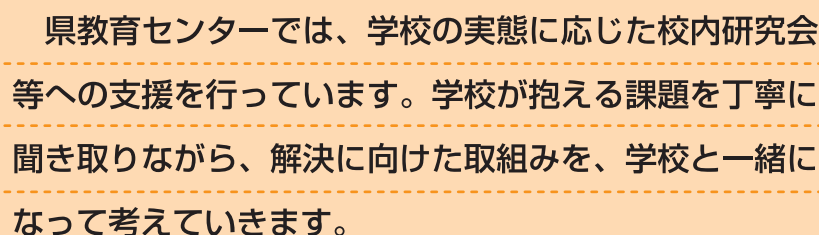
私たち高等学校の教員は、いわば教科の専門家です。その専門家が生徒によかれと思って行っていること（教材の準備や指導方法など）は、一人一人の生徒にとって、一体どう評価されているのでしょうか。もしかしたら、その教科を苦手としている生徒は、「まったく分からない。」「ますます分からなくなりました。」などと思っているかもしれません。

私たち教員は、そういう意識を常にもつ必要があると思います。だからこそ、あの子たちの感覚を大事にしなければならないのではないのでしょうか。

5ページで示した

「地理歴史」の授業を参観して、事後研究会には参加しなかった「家庭」担当の教員が記入した「授業公開シート」です。

事後研究会に参加しなくても、自分の意見や考えを授業者に伝えられる。また、増し刷りすることで、事後研究会でも、取りあげて全体で共有できる。

[illegible]

このハンドブックは、村川雅弘編集『「ワークショップ型校内研修」で学校が変わる学校を変える』教育開発研究所2010を参考に作成しました。